

音楽と私

成田シニアアンサンブル青空 副団長 原 浩美

私が幼少の頃、父は、習っていないのにオルガンで「スワニー川」や「荒城の月」をよく弾いていました。メロディーと伴奏を流暢に合わせる姿に、「かっこいい、私もやりたい」との思いが芽生えたのが、音楽との関わりの始まりでありました。

オルガン教室を経て、小学生になった私はピアノに憧れ、近所に住む高校の音楽の先生のお宅でピアノを習うことになったのです。グラインドピアノが向かい合わせで置かれている広い応接間は、大きなステレオのセットがあり、壁一面の棚にレコードがあふれんばかりに並んでいました。学校から帰ると勝手に艶々としたピアノを弾かせて（触らせて？）もらい、可愛い室内犬と遊ばせてもらう合間に練習の日がやってくるというような日々でした。気まぐれな私のために、時にはクラシック音楽のレコードを鑑賞するだけの日もありました。このことが、今の私に大きく影響しています。

さて、先生の勧めてくれたレコードはピアノ曲はもとより、特に弦楽器だけの曲やバイオリン協奏曲が多くありました。何時しか弦の繊細な響き、バイオリンのフォルムの美しさにまた次の憧れが生じていたものの、社会人になってからは様々な理由から実現できませんでした。ですが「いつかはバイオリン弾くんだ」と細々と気持ちの中に持ち続けていました。

そんな私がバイオリンを手にし、友人に手ほどきを受けて始めたのは45歳を過ぎてからでした。始めた頃は「なんで買ってしまったのだろう」と後悔の日々。大人になってからでは、まず右手で持つ弓がまっすぐ上げ下げ出来ません。変な癖がついてしまうのです。

バイオリンを持つ左手も正しく構えられず、運指と強弱、楽譜を見ながら同時に行うなんて無理です。なにより弦を押さえる場所は印もないのです。ぎこちない音を聞き、音程が合っているかピアノで弾きながらの練習でした。それでも少しずつ曲が弾けるようになって、子どもの時には味わえなかった喜びととともにもつと弾いてみたいとの思いが湧いてきました。

そして今から9年前の2013年9月、青空の創団を知り、シニアは50歳からということころを、私は49歳で入団させていただきました。バイオリンを始めて4年、やっと簡単な曲が弾けるぐらいの私を先輩方が受け入れてくださいました。今年で10年目になります。「皆さんと一緒にできることが嬉しい」という気持ちは全く変わりません。

アンサンブルはハーモニーを奏でる難しさにあります。また自分の音と回りの音が合っていると感じられたときの心地よさ、楽しさは何ともいえません。青空では同パートの団員さんからたくさんアドバイスを受けることができ、バイオリン初心者である私には本当に貴重な場です。耳元で素敵な旋律を聴けるのも一番の練習です。また、クラシック、ジャズ、ポピュラーなど練習した色々な曲を演奏する機会が、地域の社会活動に繋がっていることも自身の大きな励みになっています。

コロナ禍にあつて感染対策を行いながら、練習会場の確保や個々の団員の健康管理のもと、2022年5月に三年越しの「第5回定期演奏会」を開催できたことは感無量でした。創団からご指導くださっている指揮の成島先生や団員の皆様に囲まれながら、これからも青空でのバイオリン演奏は、私の生活の中での「ご褒美の時間」として続けていけることを願っています。

